

- 1 学年 第3学年
- 2 単元 国語科「しつ問名人になろう」（もっと知りたい、友だちのこと）
- 3 実践内容

【目指す子供像に至るための具体的な方策・授業改善】

(1) 学習の見通しをもたせる工夫

- ・児童自らの生活や経験の中、疑問から生み出された課題づくりをする。
- ・児童が見通しをもち、主体的に取り組むことができるような準備をする。→できる限り可視化する工夫



(2) 授業展開の工夫

- ・児童が考えたり表現したりしながら質の高い気付きを獲得できるように発問を精選。
- ・意図的なグループ交流場面を設定する。→言語活動による対話的な学び
- ・「伝え合うスキル」、聞き方上手の「あいうえお」の活用をする。
- ・ICTの活用やホワイトボード、付箋を使って考えを整理させ、深めさせる工夫をする。

(3) 学びの振り返りの充実

- ・まずは本時の中の事実とそこからの気付きを書くことから始めている。事実を見つめる振り返りの積み重ねは内省する視点を育むことにつながる。

4 成果と課題

当たり前なことだが、一人の単視点的な見方は、他者の見方を聞き、知ることによって多視点的な見方、考え方へと広がるものである。そこで、小さな集団ならば、一人の子供が何度も話し合いに参加し、疑問や意見を言える子供たちに育てることを目指していこうと考えた。そのためには、一人の子供が何通りもの解決を試みるとともに、質問ができる子供たちに育てなければならない。自分の考えを分かりやすく伝えられる話し手に育てることも重要だが、まずは質問できる聞き手、友達の考えに補足できる聞き手に育てることがより重要であると考え、様々な教科で研修を進め、少しずつ成果が見られている。

課題としては、数人による仲間集団は、「自分の考えを最後まで言わなくても、友達に分かってくれる」と思い込んでいる子がいることや、聞いたけれど相手の言っている内容を理解しているのか疑わしい子がいることである。「ちょっと違うかも」と気付いても、突っ込んで言えないというようなこともある。よい意味での競い合いや磨き合いがしにくい。やはりそういう時に、教師が一石を投じて、練り合う仕掛けを作り続ける必要があると感じた。

少人数では、児童一人一人の個性や特性に応じた活動がしやすく、個々の能力や適性を伸ばしていきやすい。上記のような授業改善の取り組みを繰り返していくことで、子供たちは互いの関係を深めながら、目指す子供の姿に近付いていくと信じている。